

して二年後退院して現在は健康な毎日を送っています。

引揚日記

福岡県 中島 歌子

日僑浮善後連絡所が設置されて全日本人の管理が出来て五月一日より撫順地区の日僑遣送が開始された。死ぬか、生きるかの境地より我々に一縷の望みがもたらされたわけである。中国經濟部撫順炭鉱の技手として徴傭されていた私達の内にも、色々と帰国説が持ち上がってくるようになり、最後の残留者を残して帰国できるようになった。食事情の悪い日本に帰る我々には並々ならぬ決心が必要だった。しかしすべての日本人は終戦の日本祖国の姿を一目見て死にたいという、憂国のやみがたい情があった。私は六月十日に、行き倒れて死んでもやまない強い気持ちで帰国を申し出て徴傭解除になった。心配の幾日かが続いた。そして戴いた最後の給料は親子三人で持ち帰るには足りない額だった。帰れるその日

まで売り食いで命を得た。家の中の目ぼしい物がなくなった。大事な専門書には封印が張られてしまい手がつけられない。

日僑浮から私に引揚第三十九大隊の第一中隊長の指名があった。私は最善をつくして三百人の生命を祖国日本に送り届けることを覚悟した。すべての準備は出来上がった。今日は最後の日である。七月一日私はこの最後の家にすでに同居していた中国医、傘慶都先生を始め、兄弟と親しい友を呼んで残留者と最後の別れの会を開いた。すべての文化より遠ざかり、そしてリュック一袋の生活にはいるのだ。畳の上で、そして最後まではなさなかったお布団の中でやすまれるのは今夜限りだ。家もない、着物もない、金もない、私は今夜一夜明けるとまったく乞食に一変するのだ。

敗戦、そして帰国、こんな大きな心の痛みがあるべきだろうか。三歳になる宏子には済まなく思う。しかし私はこの子を支那大陸に置きたくない。そして死なしたくない。私は日本に連れて帰りこの子の成長を見守る。

まったく親と離れて戦災児童になる子どもは気の毒な

ものだ。

この一篇を私は書きつづけるとともに、私のこの人生記録は永く一冊をなすだろう。

いま私は運良く畳の上にいるし、親子三人が一緒に暮らしているが、何一つ持たない、撫順を出たときのままだ。毎日を辛抱しながら福岡で暮らしている。

当時を偲びながら引揚一周期にあたりこの一篇をつづる。

追記

苦しい生活の中、善良に生き伸びんとする引揚者のために、そして民主日本の再建にまったく裸一貫より男らしく立ち上がろうとする引揚者のために、苦しみ、いわゆる死線を越えて帰ってきた人々のために、これらの人は、これらの人々の気持ちは、いかなる影響を社会に及ぼしているか。

ヤミ商売は引揚者だという。そしてすべての方面において引揚者という言葉を書かれた人はどんな生活をしているか、どんな気持ちで暮らしているか、世の引揚者があの苦しい体験を生かして祖国日本の再建、民主日本の

発展のために戦いぬかんことを希望する。

二十二年七月十日夜

この書は一個人の小さい日記にすぎないが、私の今は亡き主人中島留蔵が子供達のためにと記しておいたものであります。

満州での死の逃避行

(子どもの霊に捧ぐ)

北海道 中村 久尚

私は昭和十五年十一月に甲府第四十九連隊を除隊と同時に満州への農工開拓移民に応募し合格したので翌十六年妻を娶り同年十二月十四日と記憶しているが、確か大東亜戦争の始まった直後だった。

全国各地より集まった人達と満州牡丹江省東寧河沿第一十五野戦兵器廠に軍属として勤務を命ぜられ農地二町歩を与えられた。

この農耕に付いては満人農家に委託し収穫物は部隊で